

大津百町と周辺に うまれた歴史文化

藤尾

長等

逢坂

中央

平野





大津百町と 周辺にうまれた歴史文化



園城寺観音堂

縄文時代～平安時代

藤尾、長等、逢坂、中央、平野の各小学校通学区は、江戸時代の大津百町とその周辺の地域からなります。縄文時代の遺跡は知られていませんが、中保町遺跡からは弥生時代から奈良時代の土器が見つかっています。また、古墳時代の前方後円墳の兜稻荷古墳があります。御陵町にある亀塚(亀丘)古墳は、**弘文天皇陵**とされています。

667年に中大兄皇子は大津に都を移し(大津宮)、翌年に即位して天智天皇となりました。滋賀学区の錦織遺跡で、大津宮の建物跡が見つかっています。平野学区の名前の由来となった**平野神社**も、大津宮遷都にあわせてまつられたといわれます。また、同じ平野学区には天智天皇や、その息子である大友皇子(弘文天皇)をまつる、

石坐神社や法傳寺があります。

天智天皇の死後、壬申の乱に勝利して即位した天武天皇は、都を大津から飛鳥(奈良県明日香村)に戻しました。そのため、大津宮の歴史は5年余りで終わり、都のあった場所も荒れ果ててしまいました。飛鳥や奈良に都があった時代には、北国や東国に向かう道は横木一丁目から**園城寺観音堂**の南へ通じる小関越が利用されていました。藤尾はこの道で、園城寺(三井寺)と深く結びついていました。

大津を復活させたのは、天智天皇のひ孫の桓武天皇でした。794(延暦13)年に平安京に遷都し、この頃は「古津」(昔の港)と呼ばれていたこの地を改めて「大津」(大きな港)という呼び名にしました。琵琶湖を往来する船で運ばれてきた荷物は平安京の東の玄関口となった大津に集められ、

京へ運ばれていきました。11世紀の初めにまとめられた『新猿楽記』には、大津に馬で荷物を運ぶ馬借や、荷車で荷物を運ぶ車借といった運送業者が登場します。平安時代の終わりには、年貢の保管や輸送にあたった問丸も活動していました。

大津と京都の間の難所が逢坂山です。平安時代には逢坂関が置かれ、関所には坂神がまつられました。やがて琵琶の名手として知られた蝉丸の伝説とも結びつき、**関蝉丸神社**となりました。逢坂関の近くには関寺が創建され、藤原道長も参詣しました。

平安時代からこの地域の歴史に深くかかわったのが、園城寺(三井寺)です。智証大師円珍によって再興された園城寺は、多くの荘園(貴族や寺社の私有地)の寄付をうけました。

鎌倉時代～室町時代

平安時代の終わりから、大津は西浦と東浦と呼ばれる地域に分かれていました。園城寺の門前にひろがる港町であった西浦(長等学区)の繁栄は、1242(仁治3)年の火災で1,000軒余りが焼失したと、京都の貴族が日記に書いているところからも知られます。それに対し、東浦(中央学区、平野学区)と呼ばれた地域は、延暦寺が支配するようになります。東浦では、延暦寺の守り神である日吉社の神人(下級の神職)が、金融業者として活動していました。東浦の港からは、東国へ向かう旅人を乗せた渡し船が出て、矢橋や山田、志那(すべて草津市)などに通っていました。

鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇は、1334(建武元)年に建武の新政をはじめます。しかし、政権内部で足利尊氏と対立し、南北朝の乱がおこります。延暦寺が南朝に味方したのに対し、源氏とのつながりが深かった園城寺は北朝に味方し、戦乱にまきこまれました。

浄土真宗を発展させた蓮如は、京都東山にあった本願寺を延暦寺によって壊されると、1469(文明元)年に園城寺の保護により近松御坊(近松別院)を建立します。近松別院の近くには、**犬塚の櫓**や**安養寺**の身代わり名号石といった、蓮如の

困難を救った伝説が残されています。

1571(元亀2)年にキリスト教の宣教師がポルトガルに送った報告書には、大津のことを「三井寺と称する町」「人口約二千」と記しています。大津は三井寺(園城寺)の門前町というイメージが強かったのでしょう。

安土桃山時代～江戸時代

羽柴(豊臣)秀吉は、1586(天正14)年頃に坂本にあった城を大津に移しました(大津城)。大津は逢坂越えて京都に通じ、その途中で、奈良街道(伏見街道)を通って伏見から淀川を利用すれば、秀吉の本拠地である大坂に行くことができました。最初の**大津城主**となった浅野長吉(長政)は、大津百艘船という船仲間をつくり、琵琶湖の水運を利用した荷物輸送に力を入れました。



大津城跡から出土した瓦(大津市埋蔵文化財調査センター保管)

1595(文禄4)年、園城寺は豊臣秀吉の命令によって、突然領地を没収されます。この処分は、秀吉が死去する前日に解かれ、五別所村、山上村、藤尾村など7か村と、関寺・追分・大谷の各町の屋敷が園城寺の領地に戻りました。

秀吉の死後、関ヶ原の合戦を前に、大津城は戦いに巻き込まれ、城下町は焼失しました。その後、徳川家康は城を膳所に移し、大津町復興のために大津町と関寺町・大谷町・追分町の町屋敷の地子(土地にかかる税金)を免除しました。江戸幕府が開かれると、大津城本丸跡には幕府の米蔵と代官所が置かれ、大津代官が大津町を支配しました。8代将軍徳川吉宗の享保の改革から50年ほどの京都町奉行支配の時期をのぞいて、大津代官の支配は江戸時代の終わりまで続きました。

江戸時代の大津町は東海道の53番目の宿場で、

百の個別の町があったところから**大津百町**と呼ばれます。大津百町は、東海道と北国海道（西近江路）という主要な街道が通っていました。そして、京町通り、中町通り、浜通りの3本の道を軸に、港町、門前町、宿場町と、様々な顔をもっていました。

おおよそ中央学区にあたる港町としての大津は、湖岸に闕と呼ばれた船着き場があり、幕府蔵や大名の蔵屋敷が建ちならびました。そこでは琵琶湖を運ばれてきた米や多くの荷物が集められ、京都へと運ばれていったのです。今も残る**小舟入**と**石場の常夜灯**は、港町の面影を伝えています。港町大津では多くの豪商が誕生し、その財力が、精工なからくりと豪華な見送り幕などで飾られた曳山が巡行する天孫神社の祭礼、**大津祭**を生み出しました。

また長等学区周辺は、西浦と呼ばれていたところから、園城寺の門前町としての歴史をもっています。室町時代の史料に登場する地名が大津百町の地名となり、今も自治会名として残っています。札の辻で東海道から分かれた北国海道を中心に、町が広がります。園城寺は**近江八景**の一つ「三井晩鐘」で知られ、観音堂は西国三十三所観音巡礼の札所として、多くの参詣者でにぎわいました。この地域はおおよそ長等学区の範囲に含まれます。

東海道五十三次の宿場町であった**大津宿**は、東海道と北国海道が分かれる札の辻が中心です。札の辻の名前は、高札場（板札に法令を書いて掲示した場所）があったことに由来します。札の辻から京都へ向かう東海道の両側には、大名が宿泊した**本陣**や脇本陣、一般の旅人が宿泊した旅籠が並びました。1805（文化2）年には、米を運ぶ牛車のために**車石**が敷かれました。逢坂峠をこえた大谷町では、片岡庄兵衛が1612（慶長17）年に日本で最初のそろばん（大津算盤）を作ったといわれています。また、大谷町や追分町では土産物として**大津絵**が売られました。これらの地域はおおよそ逢坂学区と藤尾学区の一部にあたります。

大津百町から東に続く松本村と馬場村も、大津代官の支配を受けました。俳人の松尾芭蕉が、馬場の木曾塚（義仲寺）にしばしば滞在したことが

知られています。芭蕉は、1694（元禄7）年に大坂で亡くなると、遺言により義仲寺に葬られました。

明治時代～現代

1869（明治2）年に大津県が誕生すると、県庁は**圓滿院**に置かれ、境内地は1875（明治8）年には陸軍歩兵第九連隊の駐屯地となりました。

1872（明治5）年に滋賀県が誕生したのち、1888（明治21）年に県庁が現在の位置に移りました。1889（明治22）年に市制、町村制がしかれると、馬場村、松本村、東浦村（神出村から分かれる）、大津町、大谷町、一里町（大谷町の一部）、追分町、藤尾村、別所村（江戸時代の五別所村）が大津町となりました。一方、山上村は江戸時代の園城寺領のつながりから、錦織村などとともに滋賀村となりました。大津町は1898（明治31）年に大津市となりますが、大津町時代には1890（明治23）年の**琵琶湖疏水**開通、1891（明治24）年の**大津事件**と、歴史に残る出来事がおこっています。

1879（明治12）年に京都－大津間に鉄道が開通し、馬場駅（現膳所駅）で折り返して現在の京阪電車びわ湖浜大津駅付近にあった大津駅と結ばれました。その後、東海道線が全通し、1921（大正10）年の付け替え工事によって、現在の位置に大津駅が開業します。なお、馬場駅は何度か名前を変えながら1934（昭和9）年に膳所駅となります。大正時代には、浜大津を中心に京津電車、大津電車が開通し、後の京阪電車となります。滋賀県（近江）と福井県（若狭）を結ぶ構想により、江若鉄道も誕生しています。

昭和時代になると大津市では周辺との合併構想が進められ、1932（昭和7）年に滋賀村、翌年には膳所町、石山町と合併しました。1927（昭和2）年、日米友好親善使節として友情人形（青い目の人形）が各小学校に届けられました。しかし、1941（昭和16）年4月に大津連隊区司令部が復活し、12月には日本はアメリカ、イギリスなどと戦争を始めました（太平洋戦争）。1943（昭和18）年には別所に大津陸軍少年飛行学校が創設されました。「青い目の人形」は戦時中に多くが

失われ、市内では平野小学校の1体だけが残りしました。この人形が再発見されたのは1972（昭和47）年のことでした。

1945（昭和20）年に戦争が終わると、大津市内の軍事施設にも占領軍が進駐してきました。1957（昭和32）年から、これらの軍事施設跡は日本へ返還されていきます。やがて跡地には、大津商業高等学校や大津市役所、皇子山総合運動公園や皇子が丘公園体育館をはじめとするスポーツ施設が建設されました。

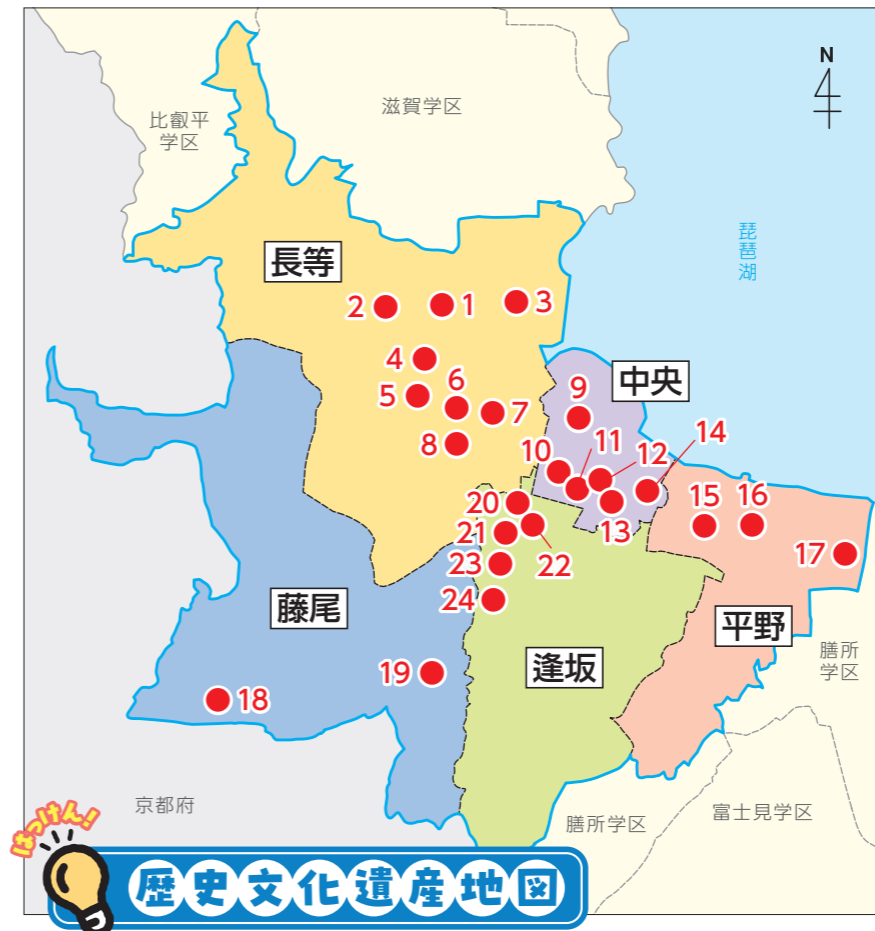
高度経済成長の中で、背後の山々には宅地が造成され、湖岸の埋め立て、湖岸道路、国道1号、名神高速道路といった道路網の整備も進められました。1966（昭和41）年から埋め立てがはじまったにおの浜から由美浜では、1968（昭和43）年、大津市制70年・滋賀県政100年の記念事業として「びわこ大博覧会」が開催されました。

1967（昭和42）年、大津市と瀬田町・堅田町が合併しました。この年、橋本町にあった大津市役所が、別所の現在地に竣工しました。1974（昭和49）年、国鉄（現JR）湖西線が開通し、西大津駅（2008〔平成20〕年に大津京駅に改称）が設置されました。



↑ 1968年のびわこ大博覧会のようす（大津市歴史博物館蔵）

現在、この地域には滋賀県庁と大津市役所があり、JR琵琶湖線の**大津駅**・膳所駅、湖西線の**大津京駅**という3つの駅と、京阪電車のびわ湖浜大津駅を中心に、鉄道が京都・石山・坂本の三方に通り、また大津港は琵琶湖を遊覧する観光船の起点となっています。2025（令和7）年には、現庁舎東側の皇子山総合運動公園の一面に市役所の新庁舎が建てられるという計画が発表されました。



NO	歴史文化遺産名称	場所
1	弘文天皇陵	御陵町
2	新羅三郎の墓	園城寺町
3	尾花川の蛇まつり	尾花川
4	圓滿院	園城寺町
5	園城寺（園城寺遺跡）	園城寺町
6	三尾神社	園城寺町
7	琵琶湖疏水	三井寺町
8	長等神社	三井寺町
9	大津城跡	浜大津五丁目
10	大津祭	中央一丁目
11	大津事件	京町二丁目
12	大津別院	中央二丁目
13	華階寺のイチョウ	京町三丁目
14	常夜灯（小舟入）	中央四丁目
15	平野神社（蹴鞠祭）	松本一丁目
16	義仲寺	馬場一丁目
17	石坐神社	西の庄
18	車石	横木一丁目
19	逢坂山関跡（逢坂関）	大谷町
20	犬塚の櫓	逢坂二丁目
21	長安寺の宝塔	逢坂二丁目
22	大津宿本陣跡	御幸町
23	関蟬丸神社下社	逢坂一丁目
24	旧逢坂山トンネル	逢坂一丁目

一紀 万年前	六五〇 紀元前	一〇〇〇 紀元前	三〇〇 紀元前	五七	二三九	後三 世紀 半紀	四世紀	五三 八	五九 三	六〇 四	六〇 七	六四 五	六四 六	七世紀 後半	六六 三	六六 七	六七 二	六九 四	七〇 一
狩りや漁をして暮らす			日本へ稲作と金属器が伝来	倭の奴国王が後漢の光武帝より印綬を授かる	卑弥呼が魏に遣いを送る	前方後円墳の出現	大和朝廷が日本を統一し始める	仏教が伝わる	聖徳太子が摂政となる	十七条憲法の制定	法隆寺の建立	大化の改新			白村江の戦い	大津宮へ遷都	壬申の乱	藤原京へ遷都	大宝律令の制定
	石山貝塚、堂谷遺跡、栗津湖底遺跡がつけられる	滋賀里遺跡などで集落が営まれる	早期	前期・中期	後期	前期	中期	後期					畿内国が定められ、その北限が逢坂山とされる	園城寺前身寺院、大津廃寺が建立される			大友皇子が「山前」で亡くなる		

(●は当地域に関わること)

歴史文化遺産 地図番号 1 弘文天皇陵

御陵町 飛鳥時代～



弘文天皇陵

弘文天皇は、壬申の乱で大海人皇子に敗れた、天智天皇の子である大友皇子のことを指します。のちに明治政府によって歴代天皇に加えられて「弘文」の名前が贈られ、御陵町にある亀丘(亀塚)が陵墓候補地に挙がりました。土中から鏡・剣・鏃が出土したとして、のちの滋賀県令(今の県知事)の籠手田安定の推薦により、1877(明治10)年に弘文天皇陵として定められました。しかし、これらの遺物は埋め戻されたようで今では見る事ができません。弘文天皇陵が大友皇子の時代に造られたかどうかは不明です。

歴史文化遺産 地図番号 5 園城寺遺跡

園城寺町 飛鳥時代～



園城寺金堂付近で出土した瓦(園城寺蔵)

長等山の東側にあるこの遺跡は、今の園城寺(三井寺)が建っている場所の地下にあります。これまでに、飛鳥時代～平安時代末頃の瓦が発見されています。特に飛鳥時代の瓦は、7世紀後半の大津宮ごろに造られた穴太廃寺、崇福寺、南滋賀町廃寺、大津廃寺と似た技法や文様を使っています。このことから、園城寺の前身にあたる古代寺院があり、大津宮に關係する寺院であったと考えられています。

歴史文化遺産 地図番号 15 平野神社

松本一丁目 飛鳥時代～



平野神社

社伝によると、天智天皇が大津に都を移した際に、都の守護としてまつられたことがはじまりとされます。また、1574(天正2)年に、現在の本宮二丁目にあったとされる精神社が並んでまつられるようになりました。精神社は蹴鞠の神とされる猿田彦命が祭神であり、平野神社では、毎年8月9日に蹴鞠祭がひらかれています。境内の拝殿の床板、灯籠、提灯や幕などに蹴鞠の図柄をみることができます。また、1904(明治37)年に蹴鞠道の家である難波家から平野神社に寄贈された難波家蹴鞠関係資料は、重要文化財に指定されています。

歴史文化遺産 地図番号 5 園城寺

園城寺町 飛鳥時代～



園城寺金堂

天台宗門宗の総本山園城寺は、天智・天武・持統3代の天皇が赤子の時にこの寺の湧き水で体を洗い清めたという伝承から「三井寺」(御井の寺)とも呼ばれます。唐に留学し、後に延暦寺の座主となった智証大師円珍は、大友氏からこの寺を寄進され、天台宗の別院として復興しました。円珍が亡くなった後に延暦寺の中で争いがおこり、993(正暦4)年に円珍派の僧侶が延暦寺から園城寺に移りました。平安時代後半には、皇室や撰閥家の信仰を集めて多くの荘園が寄付され、境内は北院・中院・南院の三院と五別所からなりました。

園城寺は、源氏の信仰が厚く、1051(永承6)年、源頼義は前九年の役の出陣前に園城寺の新羅明神に勝利を祈ったと伝えられます。室町幕府を開いた足利尊氏は新羅善神堂(国宝)を再建しました。1595(文禄4)年、豊臣秀吉の命令によって突然領地を没収されましたが、のちに秀吉の妻であった高台院(ねい、ねね)によって金堂(国宝)が再建され、徳川家康や毛利輝元も境内の整備に協力しました。江戸時代には西国三十三所観音巡礼の14番札所と

して多くの巡礼者が訪れ、近江八景の一つ「三井晚鐘」の舞台としても、広く知れ渡るようになりました。『東海道名所記』にも登場する「千団子」は、子供のすこやかな成長を願う祭として、今にもぎわいをみせています。

明治時代には、日本美術の価値を広く世界に紹介したフェノロサが、北院の法明院住職の桜井敬徳に師事し、没後は境内に葬られました。園城寺は何度も戦乱に巻き込まれましたが、今も数多くの貴重な文化財が残されています。2023(令和5)年には円珍にかかわる古文書等が、人類が将来に伝えていくべき文化財として、ユネスコの「世界の記憶」に登録されました。

歴史文化遺産 地図番号 17 石坐神社

西の庄 飛鳥時代～



石坐神社

旧東海道に面して建つ石坐神社は、膳所城の城下町であった西の庄村の氏神です。八大龍王社とも呼ばれ、水の神様をまつる神社でもあります。本殿は、鎌倉時代の様式を伝える神社建築で、滋賀県の文化財に指定されています。本殿の内部には、重要文化財に指定されている4体の神像(祭神のうち天智天皇、弘文天皇(大友皇子)、伊賀采女宅子娘(弘文天皇の母)、彦坐王)がまつられています。

一五八二	一五八四	一五八六	一五八七	一五八八	一五九〇	一五九二	一五九五	一五九八	一六〇〇	一六〇一	一六〇二	一六〇三	一六二二	一六一五	一六四四	一六四五	一六三七	一六三九	一六四二	一六五一	一六六二	一六八五	一六九四	一六九八	一七〇九	一七一六	一七三四	一七三五
本能寺の変 豊臣秀吉の検地が始まる				刀狩令	豊臣秀吉が全国を統一する	豊臣秀吉が朝鮮出兵を始める			関ヶ原の戦い			徳川家康が征夷大将軍となる		武家諸法度 豊臣氏が滅びる			参勤交代の制	島原・天草一揆	鎖国の完成			生類憐みの令			新井白石の政治	享保の改革		
坂本城が落城し、その後再建される	豊臣秀吉が、延暦寺の再興許可を出す	●このころ、坂本から大津に城が移される	●大津城主浅野長吉が大津百艘船の特権を認め、高札をたす				●園城寺が豊臣秀吉により闕所となる	●大津町、松本新町、山上村などで太閤検地がおこなわれる	●大津町が徳川家康の直轄領となる 大津城の戦い	戸田一西が膳所城を築城	●大津町が東海道の宿場町に指定される	●大谷町の片岡庄兵衛が日本初の算盤を作るという			●このころから大津絵の製作がはじまる	●大津祭狸山が建造される				延暦寺根本中堂などが再建される	本多俊次が膳所城主となる	寛文大地震がおこる、膳所城をはじめ各地で甚大な被害	●大坂で亡くなった松尾芭蕉の遺体が遺言によって木曾塚に葬られる	堅田藩が誕生する			膳所藩士寒川辰清が『近江輿地志略』を編纂	●大津の坂本町に大津御用米会所ができる

(●は当地域に関わること)

歴史文化遺産
地図番号
9

おおつじょうあと
大津城跡

浜大津五丁目 安土桃山時代



大津城跡石碑

1586(天正14)年から翌年に、豊臣秀吉が作った城です。現在のびわ湖浜大津駅一帯に本丸があり、それを取り囲むように二の丸・三の丸が広がっていたといわれています。秀吉は、大津城をつくるにあたり、坂本にあった城と城下町を大津に移しました。大津城と城下町には米や木材などの荷物が集まり、大変にぎわいました。関ヶ原の戦いの後、徳川家康は大津城を移して膳所城をつくりました。一方で、大津は江戸幕府が直接治めることになり、商業都市として発展しました。

地域の芸術

おうみはっけい
近江八景「三井晩鐘」

江戸時代



歌川広重「魚米版」
近江八景「三井晩鐘」
(大津市歴史博物館蔵)

近江八景は、中国の景勝地である「瀟湘八景」になぞらえて、近江南部から選ばれた8つのすばらしい景色のことです。江戸時代初め、公家の近衛信尹が膳所城から見える範囲の景色を選んだとする説が有力です。屏風絵や絵画作品の題材として取り上げられ、初代歌川広重や葛飾北斎などが浮世絵として出版したことで多くの人に知られるようになりました。近江八景のうち「三井晩鐘」の浮世絵は、夕暮れに日没を告げる三井寺(園城寺)の鐘の音が遠くまで響きわたる情景を表現したものです。

地域の芸術

おおつえ
大津絵

江戸時代



大津絵「藤娘」
(大津市歴史博物館蔵)

大津絵は、東海道五十三次の最大規模の宿場である大津宿の大谷・追分で販売され、名物として人気のあった土産物絵画でした。江戸時代前期に仏画からスタートした大津絵は、17世紀の末から風刺をきかせた鬼念仏や良縁のお守りとされる藤娘など多くのキャラクターが描かれ、街道を行き交う全国の旅人が買い求めました。江戸では歌舞伎にも登場するほどの人気があり、現代でも、様々な大津絵を市内のあちこちで見ることができます。

歴史文化遺産
地図番号
18

くるまいし
車石

横木一丁目ほか 江戸時代



閑栖寺に復元された車石

江戸時代に大津から京都へ運ばれた荷物の中心は、琵琶湖を水運で運ばれてきた米でした。1797(寛政9)年に出版された『伊勢参宮名所図会』には、人が通る街道の脇を、牛が米俵を載せた荷車を曳く様子が描かれています。大津と京都の間では、1804(文化元)年から翌年にかけて、荷車の車輪が通る部分に車石と呼ばれる石を敷く工事が行われました。この石は、車輪の通った部分がくぼんでいます。明治時代以降の道路改良工事使われなくなった車石は、横木一丁目の閑栖寺、大谷町の逢坂関記念公園と蟬丸神社、春日町のJR大津駅前、御陵町の大津市歴史博物館などに一部が復元展示されています。

歴史文化遺産
地図番号
12

おおつべついでん
大津別院

中央二丁目 江戸時代



大津別院本堂

本願寺の門主である教如により、1600(慶長5)年に創建された真宗大谷派の寺院です。現在の本堂は、1650(慶安3)年に再建され、その背面には、1670(寛文10)年に再建された書院が取り付きます。本堂は、阿弥陀如来をまつる内陣と、参拝者が集まる外陣に分かれています。多くの人が参拝できるように、内陣に比べ外陣が広いという、浄土真宗の寺院本堂の特徴を持っています。書院の内側には豪華な障壁画が描かれています。本堂と書院は、国の重要文化財に指定されています。

歴史文化遺産
地図番号
22

おおつしゆくほんじんあと
大津宿本陣跡

御幸町 江戸時代



大津宿本陣跡碑

江戸と京都を結んだ東海道の53番目の宿場であった大津宿には、大名が宿泊した本陣・脇本陣がありました。札の辻の近くには、1926(昭和元)年に建てられた「明治天皇聖跡碑」と、2023(令和5)年に建てられた「大津宿本陣跡」の碑があります。明治天皇は1868(明治元)年から翌年にかけて東京と京都の間を何度か往来していますが、その途中で大塚本陣(大塚屋嘉右衛門)に滞在しました。当時の本陣は建築面積が240坪あり、3階の上にあった四畳半の茶室からは、琵琶湖の景色をながめることができたそうです。

一七七一	田沼意次が老中となる	●大津代官の大津町支配が復活
一七八一	●園城寺三列所の山に米相場の連絡場所が許可される(相場山)	
一七八七	寛政の改革	
一七九四	●逢坂峠に常夜灯が建設される	
一八〇四	●伊香立で龍骨(トウヨウソウの骨化石)が発見される ●大津・京都間の東海道に車石の敷設工事がはじまる	
一八〇五	●大津八町筋から京都三条大橋の間に車石がしかれる	
一八〇八	●小舟入の常夜灯がつくられる	
一八三七	大塩平八郎の乱	
一八四一	天保の改革	
一八四五	●石場の常夜灯がつくられる	
一八五二	四ツ子川に百間堤が築かれる	
一八五三	ペリーの浦賀来航	
一八五四	日米和親条約	
一八五八	日米修好通商条約	
一八五九	安政の大獄	
一八六〇	桜田門外の変	
一八六三	●徳川14代将軍家茂が上洛の途中に大津宿に宿泊する	
一八六七	大政奉還 王政復古	

(●は当地域に関すること)

歴史文化遺産 地図番号 10 大津祭



▲町内を巡行する曳山
◀本祭当日のようす

中央一丁目 江戸時代～

江戸時代の大津は、東海道五十三次の宿場町として、また琵琶湖水運の港町として、大いににぎわい、人やモノが行き交っていました。この豊かな町の経済力と文化力が生み出した、華やかな祭礼が大津祭で、ユネスコ無形文化遺産に登録されています。

今から400年ほど前、天孫神社(かつて四宮大明神と呼ばれました)の祭礼の時、神社近くの鍛冶屋町に住んでいた塩売治兵衛が、狸の面をかぶって境内で踊ったところ、たいへん評判になりました。この踊りが毎年恒例となり、祭礼を盛り上げていましたが、やがて治兵衛も高齢となり踊れなくなります。そこで、狸が腹鼓を打つからくりを車に乗せて引き回すようになり、やがて祇園祭の鉾の形をした曳山が巡行するようになります。1638(寛永15)年のことで、西行桜狸山のはじまりです。このころ、大津の各町で次々と曳山が作られ、そのほかに「ねりもの」と呼ばれる仮装行列も加わり、華やかでにぎやかな祭礼絵巻が繰り広げられました。

大津祭曳山は、車輪が三輪になっており、道の角を曲がる時にも扱いやすい構造になっている点に特長があります。各曳山には「からくり人形」が乗せられており、巡行中、各所で演じられ、人々を楽しませています。曳山を飾る高価な織物や金具も見どころで、16世紀ヨーロッパで織られた織物や中国製の織物など、大変貴重な品々が曳山を飾っています。これらの品々は、江戸時代に繁栄していた大津の経済力を今に伝えています。

現在、大津祭は9月16日のくじ取式からはじまります。本祭前日の宵宮では、各曳山が町内に停められ、たくさんの提灯で飾り、宵宮囃子が奏でられます。本祭は、スポーツの日の前日の日曜日、早朝から13基の曳山が巡行し、各所からくりが演じられます。秋晴れの下、多くの観客と一体となって、大津は終日、祭一色に染められます。

中央一丁目の曳山展示館では、大津祭について学ぶことができます。

歴史文化遺産 地図番号 14 常夜灯 (小舟入・石場)



小舟入の常夜灯 (中央四丁目)

中央四丁目、打出浜 江戸時代

江戸時代に大津と矢橋(草津市)の間には、船で琵琶湖を渡る矢橋の渡しがありました。陸路の東海道では、瀬田橋(唐橋)経由で大廻りとなるためです。これを伝えるものとして、火を付け夜間の目印となる常夜灯が今も残っています。中央四丁目の小舟入の常夜灯(市指定文化財)は、高さは約4.9mで、1808(文化5)年に建てられました。今でも同じ場所に建てられており、当時の湖岸がこの辺りまであったことがわかります。打出浜にある石場の常夜灯は、高さが約8.4mで、1845(弘化2)年に今の大津警察署付近に建てられました。その後2回移転し、現在はびわ湖ホールの西側にあります。

歴史文化遺産 地図番号 13 華階寺のイチョウ



華階寺のいちょう

京町三丁目 江戸時代～

JR大津駅から琵琶湖岸に向かう30m道路の中央分離帯に、2本のイチョウの大樹がそびえています。この場所は元々華階寺の境内地で、道路建設の際に伐採されずに残されたものです。ともに雌株で北は目の高さの幹まわりが3.8m、南は3.6mあります。華階寺ができるときに植えられたと伝えられており、樹齢は400年と考えられます。このイチョウは、江戸時代には大津の港に船をつける時の目印になっていました。陸上・湖上からの景観として貴重なものです。1975(昭和50)年に大津市の文化財に指定されました。

歴史文化遺産 地図番号 16 義仲寺



義仲寺

馬場一丁目 江戸時代～

1184(元暦)年、木曾義仲は粟津で敗死すると、ここに葬られたと伝えられています。義仲の側室の巴御前の墓もそばにあります。江戸時代には松尾芭蕉がしばしば滞在しています。芭蕉は大坂で亡くなると、遺言により義仲の墓のそばに葬られました。義仲寺境内は国の史跡に指定されています。

義仲寺の南の国道1号線沿いには、市指定史跡の竜が丘俳人墓地があります。芭蕉の門人の内藤丈草が芭蕉の追悼のためにたてた経塚を中心に、17人の俳人塚が輪になって並ぶ風景は、まるで句会をしているようです。



凡例

- ・本書は地域学習のため、各学区の歴史や歴史文化遺産について説明したものです。
- ・年表は日本のできごと、大津市のできごとを示し、本書に関わるものについては印をつけています。
- ・執筆は大津市市民部文化財保護課および大津市歴史博物館職員が分担し、編集は文化財保護課にて行いました。
- ・本書の作成にあたり、各文化財所有者の方々にご協力いただきました。

表紙写真 上段：園城寺金堂、中段：大津祭、下段：大津絵「鬼念仏」(大津市歴史博物館蔵)

裏表紙写真 上段：琵琶湖疏水、中段：平野神社の蹴鞠祭、下段：逢坂山関跡

- ・総論中の太字については、後のページで解説しています。
- ・掲載画像は、特記のあるもの以外は大津市の撮影または所蔵です。

発行／大津市

発行日／令和8年3月27日

印刷・デザイン／株式会社富士印刷

小学校		
年	組	番
名		
前		